

手相身

「あのう、すみません。いま、手相の勉強をしているんですが、手を見せ
ていただけませんか。そんなに長い時間はかかりませんから」

銀座の大通り、朝のラッシュが終わってお昼までの人通りが少ない時間帯
である。気の弱そうな一人のOL風の女性が近づいてきた。

ははあ、来たなと私は思った。いつもは日本橋の地下道で声をかけられる。
黒いカバンをさげたサラリーマンのような若い男の人が「恐れ入りますが」
と、まことにていねいに声をかけてくる。私は、初めのうちは単純に、な
るほど、こうやってたくさんの人の手を見て勉強するのかなと思っていたが、
方々で同じように声をかけられると、これは商売なのかな、宗教なのかな
という疑問が出てきて、最近あまり協力的な気分になれないでいた。しか
し、この人たちは何なのだろうという好奇心はいつもあって、一度話を聞い
てみようと思っはいた。そこで私は、その女性に右手を差し出した。女性
は、「小林です」と名前を言ってから私の手のひらを調べ始めた。

「ああ、今転機に立っていらっしゃるんですね。いいものをたくさん持って
いらっしゃるのに、それが発揮できないんですね。これは原因を取り除かな
いと運が開けませんよ」と言った。原因は何なのかと聞くと、「それは名前を

見てみないと…。喫茶店へ行きましょう」と言う。そしてそれに同意すると、
今度は、「私が見てもいいんですが、先輩が見たほうが確かですから、先輩の
ところへ行きましょう。すぐこの近くにいますから」と言う。私は何
かめんどろになりそうな予感がして、「私はあなたに見てもらいたいわ」と言
ってみた。小林さんはどうしても先輩に合わせたい様子であったが、仕方な
く喫茶店のほうへ私を連れていった。

コーヒーを注文した後、小林さんは、私に名前と生年月日を書かせて、
姓名の文字の画数を計算し始めた。私はどんな結果がでてくるのが楽しみに
しながら、興味を持ってその手もとを見つめていた。すると、
「これはご先祖に原因があるようですね。一度専門家に見てもらったほうが
いいですよ。私の先生が専門の鑑定家ですからご紹介しましょう。いつい
らっしゃいますか」と言いながら、一枚のパンフレットを出してきた。
「家相鑑定〇〇」と書いてある。

なあんだ、これが目的か。鑑定家が「あなたの先祖はこうだから」といっ
てお墓を建てさせたり、新しい仏壇を買わせたりという話は聞いたことが
ある。ああ、これかこれか。私は手相の本当の目的がわかって、笑いだした
くなるほど愉快になった。私は訳もなく何度もうなずいた。
「あのうちにね」

私はいつ行くとは約束せずに小林さんと別れた。愉快的気分のままだった。

だが、一人になると、今度は、私の開運をじゃましているものが何なのか、
とても気になり始めた。